



古代山陰道 —青谷町養郷地区—

現地説明会 & ウォーク資料

令和2年2月16日
鳥取県埋蔵文化財センター

鳥取県埋蔵文化財センターでは、平成30年度から古代山陰道のルートや構造、築造時期の解明を目的とし、本格的な調査研究を進めています。今回、青谷東側丘陵の発掘調査では丘陵頂部を直線的に延びる幅9mの大規模な道路遺構を長さ400mにわたり確認することができました。

古代山陰道とは？

古代山陰道は、飛鳥時代から奈良時代にかけて律令国家が整備した大規模な道路である。駅路は「七道駅路」とも呼ばれ、都と地方を最短距離に結び、情報をいち早く伝えるために全国に張り巡らされました。駅路は発掘調査により、直線的で幅広く、側溝なども備えていたことが明らかとなっています。

青谷の古代山陰道とは？

青谷平野では、青谷横木遺跡と青谷上寺地遺跡で古代山陰道と考えられ道路遺構が発見されています。道路はいずれも盛土工法で築かれ、国内で初めて土地区画である条里地割もセットで確認されています。

また、道路の盛土内には葉や枝を敷き詰め、道路盛土の地盤を補強し、排水を行う「敷葉・敷粗朶工法」と呼ばれる高度な土木技術が確認されています。当時の青谷平野は弥生時代から続く潟湖が依然として残されており、軟弱地盤を克服するためにこうした高度かつ、最先端の土木技術が駆使されたと考えられます。

さらに、青谷横木遺跡では国内初となる柳の街路樹が発見され、重要な発見が相次いでいます。



古代山陰道推定ルートと発見された道路遺構



青谷上寺地遺跡の道路遺構



青谷横木遺跡の道路遺構



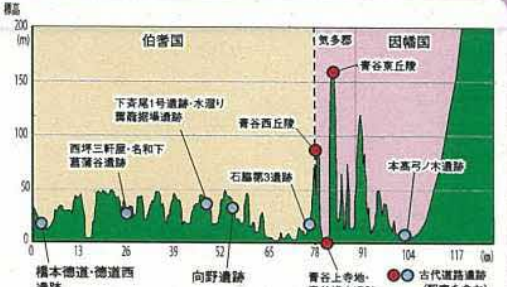
古代山陰道推定ルートと発見された道路遺構

今回の調査成果

1. 確認された道路遺構（1道路）は側溝を有し、幅9mもの規模を持つことから、青谷横木遺跡から続く古代山陰道にあたる考えられます。
2. 幅5mの道路遺構（2道路）は、道路規模を縮小した後の古代山陰道である可能性があります。
3. 今回の道路遺構の発見により、古代山陰道を示す切通しや加工段などの道路痕跡が丘陵尾根に沿って、長さ400mにわたり現地地形に良好な状態で残されていることが明らかとなりました。
4. 峠を通る古代官道が発掘調査で確認された事例は全国的にも見てもなく、重要な発見です。
5. 国史跡青上寺地遺跡や青谷横木遺跡の調査成果を合わせると、青谷地域は平野部から丘陵部にかけての古代山陰道を一体的かつ具体的に復元することができ、古代道路を研究するうえで欠かすことのできない重要な地域となつてきました。



青谷横木遺跡から東側丘陵を望む（北西から）



因幡・伯耆における古代官道の高低差 ※グラフは古代山陰道推定ルートをもとに、国土地理院HPから作成。

今後の調査予定

今回調査した東側丘陵のさらに東側の延伸部分でも、切通し等の道路痕跡を踏査によって確認しています。また、青谷上寺地遺跡でみつかった古代山陰道の延長線上にあたる青谷西側丘陵でも、大規模な切通しを確認していることから、来年度も東西両丘陵での発掘調査をさらに進めていく予定です。



大型建物

湯梨浜町石脇第3遺跡
青谷西側丘陵から因幡を越え伯耆国に入ると、湯梨浜町石脇第3遺跡で伯耆国物賀駅跡とみられる建物跡が見つっています。



駅家

駅路

山陽道の布勢駅家（播磨国・兵庫県）イメージ図
（提供 北海道教育大学教授中村太一）
駅家は役所（官衙）や寺院と同じく瓦葺きの格式高い建物が建っていたと考えられています。



国史跡青谷上寺地遺跡
古代山陰道

踏査で確認された切通し

青谷西側から青谷平野を望む（西から）

【トレンチ4】：青谷平野へ下る斜面部



尾根を岩盤にいたるまで大規模にカットし、道路盛土を施した後、道路側溝が掘られています。道路はこの付近で西側に向かって屈折し、坂道（養郷坂）を下って青谷平野に達した後、青谷横木遺跡へとつながっていったと考えられます。

【トレンチ2】：丘陵尾根頂部

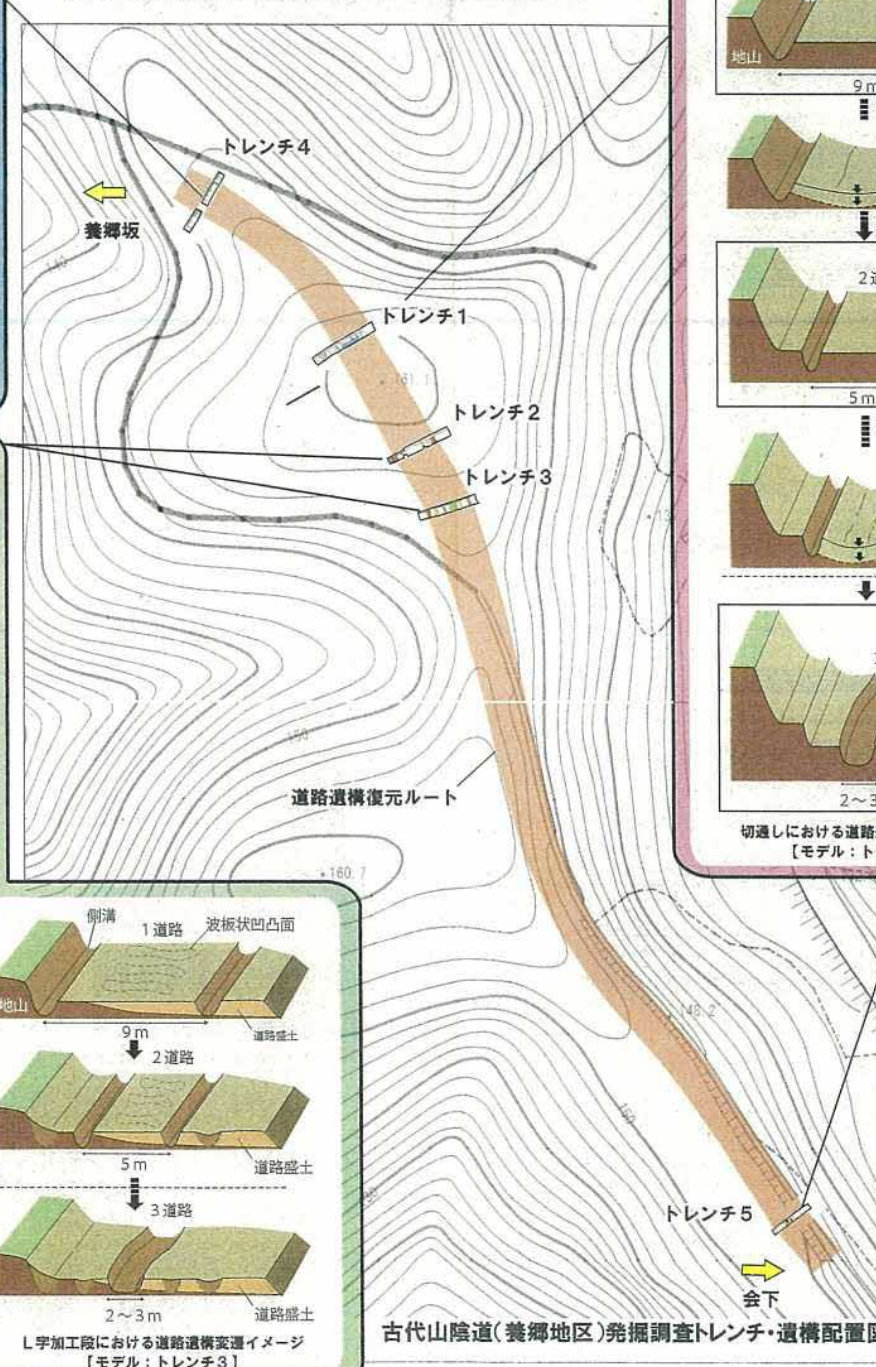


【トレンチ3】：丘陵頂部から南と下る緩斜面部

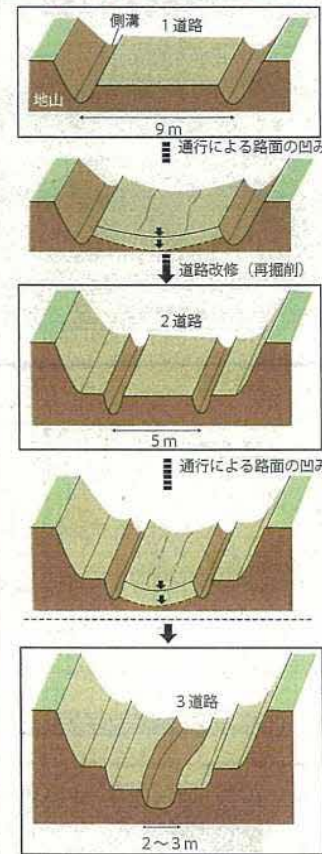


両トレンチとも道幅9mの道路遺構（1道路）と、その内側で道幅5mの道路遺構（2道路）が見つかります。トレンチ3では尾根をL字にカットし、斜面側に盛土を施すことで、大規模な道路遺構がつかわれています。2道路は1道路が規模を縮小した段階のものと考えられ、最終的には、幅2～3mの側溝を持たない道（3道路）がルートが踏襲してつくられたと考えられます（右イラスト）。

青谷東側丘陵における発掘調査



【トレンチ1】：丘陵頂部から北へ下る深い切通し部分

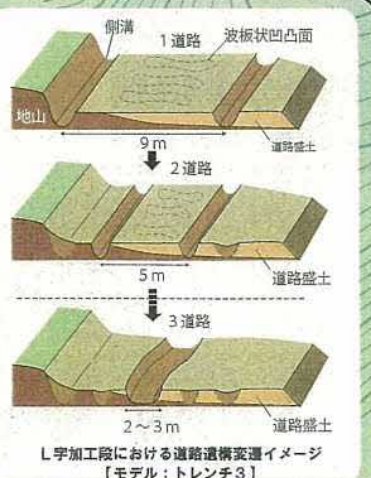


調査前の切通しのようす



発見された道路遺構と切通しの関係

トレンチ1周辺には、尾根筋に沿って大規模な切通しが現地形に残されています。発掘調査では、最終段階の幅が狭い3道路のみが残されていません。しかしながら、切通し法面に残る痕跡から、当初、切土工法（オープンカット工法）でつくられた幅広い道路が通行や道路改修による再掘削などにより、徐々に切通しが深くなり、道路規模が縮小されていったようすを復元することができます（左イラスト）。



【トレンチ5】：丘陵尾根斜面部



トレンチ4と同じく、丘陵尾根をL字にカットした道路遺構が確認されています。1道路の側溝は、後世に流出して残っていませんでしたが、2道路の側溝を確認することができました。また、路面部分には、波板状凹凸面と呼ばれる道路遺構に特徴的な凹みが確認されています。これは、道路地盤を補強するために用いられた土木工法と考えられます。

古代山陰道(養郷地区)発掘調査トレンチ・遺構配置図